

令和5年度 第2回神戸の子ども居場所フォーラム

～子どもが外遊びできる協働の居場所づくり～

日時：令和6年2月1日

開会 午後 3時00分

○江坂課長 大変お待たせいたしました。定刻がまいりましたので、ただいまから「令和5年度第2回神戸の子ども居場所フォーラム～子どもが外遊びできる協働の居場所づくり～」を開催させていただきます。

私、地域協働局地域活性課課長の江坂と申します。どうぞよろしく願いいたします。

また、本日はWebで御参加いただく出席者が1名おられます。

円滑に議事が進むよう努めてまいりますけれども、御協力いただきますよう、お願いいたします。

また、本日のフォーラムは、公開のため、会場にて傍聴していただいている方がいらっしゃいます。

では、最初に、出席者の皆様を御紹介させていただきます。

子供の遊び環境等を研究されております、神戸女子大学家政学部家政学科教授、梶木典子様です。

○梶木座長 よろしく願いいたします。

○江坂課長 なお、梶木様には、このフォーラムの座長を務めていただいております。

須磨区の八幡神社鎮守の森などで、森のようちえんをされております、一般社団法人森のようちえんすまっこのもり代表理事、澤井一紗様です。

○澤井氏 よろしく願いします。

○江坂課長 灘区、一王山町十善寺内の茶屋の女将であり、一王山の自然を生かした地域活動をされております、カミカ茶寮+読林の豊永祐子様です。

○豊永氏 豊永と申します。よろしくお願いいたします。

○江坂課長 灘丸山公園などでプレーパークを開催されております、特定非営利活動法人 S - p a c e 理事長、越智正篤様です。

○越智氏 越智です。よろしくお願いいたします。

○江坂課長 なお、第1回のフォーラムにおきまして、越智様につきまして、急遽、御都合のため欠席と御報告をさせていただいたところですが、会の当日の開始時刻、10時までにZoomの入室を試みていただいたのですが、入室いただけず、10時以降も入室していただくとしていただいたのですが、事務局側も、会の円滑な進行のために、フォーラムの開始後、対応ができなかったということで、御欠席とされました。

議事録を含めて、訂正のほうをさせていただきます。

後ほど、活動につきましては、議事の中で御紹介をいただきたいと思っております。

次に、W e b で御参加をいただいております1名の方を御紹介いたします。

地域のまちなか広場づくりに関わっておられます、全国まちなか広場研究会理事、山下裕子様です。

○山下氏 山下です。よろしくお願いいたします。オンラインでの参加失礼いたします。

○江坂課長 続きまして、行政からの出席者を紹介いたします。

神戸市こども家庭局、丸山副局長です。

○丸山副局長 丸山です。よろしくお願いいたします。

○江坂課長 神戸市教育委員会事務局、芝田教育次長です。

○芝田次長 芝田でございます。よろしくお願いいたします。

○江坂課長 本日はどうぞよろしくお願いいたします。

それでは、ここからの進行につきましては、梶木座長にお願いをしたいと思います。

よろしくお願いいたします。

○梶木座長　　御指名いただきましたので、ここからは私が進行を務めさせていただきます。

まず、議事を進める前に、1カ月前に起こりました能登半島地震により犠牲になられた方々に謹んで哀悼の意を表するとともに、今も困難な状況に置かれている方々にお見舞い申し上げたいと思います。

特に、非常に怖い思いをして、それでもなお前向きに頑張っている子供たちの、十分な心のケアが行き届きますようにと祈っております。

では、議題に入る前に、前回の振り返りを行い、皆さんと認識を共有したいと思います。

前回のフォーラムでは、子どもの居場所、体力の現状について、こども家庭局と教育委員会事務局様から御説明をいただきました。

子供が外で遊ぶことの重要性、必要性を改めて認識し、皆さんと共有しました。

また、出席者の皆さんの活動紹介も交えながら、外遊びの安全な居場所について意見交換を行いました。安全へのニーズの高まりですとか、不安感の高まりということが、非常に大きな話題になりました。

また、遊ぶことによる子供の成長ということで、隙間時間ではなく、遊ぶ時間をしっかりと確保していくことが必要ですとか、全身を動かすことによる体幹の成長、それから退屈というような時間の大切さ、それを生み出す創造、そこから生み出される想像力、危険を実体験することで察知する力を獲得していくというようなことに触れてきました。

また、本物に触れるということが非常に大切であるということも、議論の中でありました。

それから、場所、空間ですけれども、概ね自宅から徒歩で15分圏内、学校区内ということでしょうか、外で安心して遊べる場所の確保ということが、非常に重要であると。校庭、公園、神社仏閣、身近にあるいろんな場所でそれらを活用して、子供に

選択肢を提供して、子供たちが徒歩で遊びに行けるところが確保されるということの重要性について、意見を交換しました。

それから、そもそも子供に遊ぶ時間がないのではないかということで、この時間の確保ということも、非常に大きな話題になりました。

それで、安全ニーズの高まりということもありましたので、子供の遊びを支えるプレイリーダー的な役割をする人が必要であろうということですか、その役割を担う人材の、どんな人がいるのかなということで、学生だったり、地域で関わってくれるいろんな大人の方がいるということ、それからその人たちを育てていくということも非常に重要であるということで、いろんな意見がございました。

本日は、前回の議論を踏まえまして、外遊びの安全な居場所をどのように確保していくのか、その際に必要な、もちろん一番大切なのは家庭ですね。それから学校、行政、地域、NPOなど、それから企業さんですか、大学などの役割、それとそれらの連携について議論を進めたいと思います。

まず、前回、御活動の紹介ができておりませんでした越智さんのほうから、活動について御紹介いただきまして、そこからスタートしたいと思いますので、Spaceの越智さん、理事長ですね、活動紹介とともに御意見、よろしくお願ひしたいと思います。

○越智氏 ありがとうございます。

失礼します。Spaceの越智です。先月は、12月かな、努力したのですが、うまく入れずに、遅れて入ったのですが、欠席ということだったので、残念だったのですけれども。

今日ちょっと時間いただきましたけれども、あんまり喋っていただかないかなと思うので、一応、資料にだけ沿っていかうと思います。

Spaceというのはどういう意味なのだ。Spaceっていう空間場所で、Sでハイフンが何でついているのだと。セルフスペース、自分自身のペースでというこ

とで、後ろのペースが歩調なので、自分のペースで居られる場所という意味合いで、Space という名前をつけましたという意味合いです。

基本的な考え、ここ知って、覚えて、動いて、考える（知覚動考）を大切にしていますということで、ここが僕自身は、もう30数年前に、ある企業の研修でこの言葉が出てきて、いや企業違うよね、子育てや教育の現場で必要な言葉だよねと思いながら、今、ずっと現場で使ってきている言葉です。

ちょっと数名の、前の方には資料を渡しました。また興味がありましたら帰りしなに資料を持ってもらったらいいのですけれども。

要は、前の2文字（知覚）、知って覚えるは知識で、実際に動いて考えるは知恵やろうなど。両輪になって大切なのですけれども、どうしても大人は前の2文字（知覚）、知識を中心に考えようとし過ぎているよね。

でも、僕自身の専門は幼児体育という名目で、体育というと、皆さん技術関係かと思われますけれども、運動遊びなので、自分が体験できる、できないの体験、できるためにどうしたらいいんやろうと自分で考えてくれよというような関わり方をしたいので、だから、あとの2文字、実際にやってみたけど、うまいこといかへんかった。うまいこといかへんから駄目ってというのが、世の中の評価になってしまいます。

そうじゃないのです。うまいこといかなかったってということは、あなたはこれやったらできないってことを発見できたのだよってという関わり方をしてやりながら、じゃあ次どうするってという関わり方をしていこうというふうに考えてやっております。

そうすると、後ろの2文字（動考）でこうしたらできる、ああしたらできる、こうしたらあかんねんなってのがつながってくるということで、子供たちが実際に動いているのは、ともかく動いているよなっていうことで、ともかく動こう（知覚動考）と読むのです。

大人は知識を与えようとしません。赤ちゃんからともかく動いているのだよってことは、知識を最初から与えるんじゃないくて、実際の体験を重要視しましょうということ

で、関わらせてもらっています。これは書いてあります。その資料よかったら後で必要でしたら、頂いてもらったらと思います。

それは別に、30数年前から、平日の午後、子供たちを野山に連れて行くってことで、灘区中心だったので一王山の上のほうの、親和の裏山の一带とか、柚谷とか、須磨のほうに行かせてもらったりとかして、子供たちと行き先を子供たちと相談してから行って、それで帰ってくるみたいなことをずっとやっておりました。その子供たちが今、もう35、40の年齢になっております。

その子供たちとの話の中でも、小さい頃の遊びの体験ってとっても大事でしたし、今、生きていますっていうことを、子供たちからよく聞かせてもらっていますので、今、この話をされていることは、とっても大事なことだと思っております。

野外活動とか、プレーパークをずっと、県の支援を受けてやらせてもらっていますということになります。

あとは写真になりますので、資料そちらにありました写真を見てもらったら、こんなことふだんからやっておりますということで、プレーパークも20年近くやらせてもらって、県の支援を受けてやっております。

ここでも教えるのではなくって、自分たちが工夫しながらやって、個々の集中力っていうのはすごいものがありますので、工作を中心にやることが多いんですが、廃材をもらってくる、切り落としをもらってくる、二つと同じものがつくれない。友達のもつくっているのを見て、僕もあれが作りたい、私も作りたいたいっていうのが、幼児が来てのこぎり使いますので、けがのないように対応しますが、親もついてもらいながら、そこは幼児の対応してもらっています。そのような活動をふだんやっております。

メインの仕事は何なのだと先ほど言いましたけれども、幼児体育ということで、今も幼稚園・保育所の現場に立って、子供たちと遊んでおります。技術指導ではなくって、今言いました、できないことをどう乗り越えるのかを考えてねっていう関わり方

をさせてもらうってことです。

ですから、後でまたお話させてもらえたらと思っていますけれども、この前の小学校からじゃなくて、本当は赤ちゃんから体力を育てていかなきゃいけないのだよというのを、現場の先生たちにもお話をさせていただいております。

長くなりましたが、以上です。

○梶木座長 ありがとうございます。

小さい頃からの遊びの体験、ともかく動こうと。ともかく子供は動いているのですね。動こうじゃなくて、子供にそんなふうに通こうよって言わないでも動いているじゃないかということをお話いただきまして、確かにそうですよね。赤ちゃんも来ていただいて、ずっと動いていてということで、どんどんできることが増えてきてっていうことですね。

体験を非常に大切にされている活動を、20年、30年ぐらいされているということですが、今、御説明いただいた中で、何か、澤井さんとか、豊永さんとか山下さんとか、丸山さん、柴田さん皆さん、質問とか意見とか、ちょっと聞きたいこととか、どうですか。そういうので聞いていました。

はいでは丸山さん。

○丸山副局長 先ほど、赤ちゃんからという御指摘いただいて、すごくそうだなと思って。私もちょっと興味があって、今の所管の仕事で、赤ちゃんの健診の部署がありまして、3歳児健診をやっているのですけれども、これはもう随分と前からやっていて、その問診表に、長らく戸外遊び、外で遊ぶことをしていますかっていう質問項目があって、手元にある一番古いのが平成16年度、はいと答えた方が90%、全体で大体1万前後の回答数なんですけれども、直近の令和4年度で96.9%、ちょっとずつですけれども上がってはいると。

この背景はちょっとよく分からないのですけれども、我々も、乳幼児さんが遊べる居場所も整備をしてきたのもありますし、親御さんがそういった遊びに連れ出してい

るということも、あるのかなと思うのですけれども。

越智さんから見られて、随分前と、現代に変わってくる間で、赤ちゃんの頃の体を動かす機会とかが、前は小学校、小学生では体力の低下とかがあってというのが言われていた、データでも見せていただいたのですけれども、何か体感しておられるようなところがあったら、教えていただきたいです。

○越智氏 幼稚園、赤ちゃんから保育所に来ていて、見せてもらい、保育所、幼稚園の子供たちを見ていると、やはり子供自体は、前の会議でもあったと思うのですけれども、変わってはいないのだろうと思うのですが、大人の関わり方、周りの関わり方がすごく変わっているので、動きにくくなっているのだろうな、規制が入ってという気はします。

それから、ついつい大けがをさせないために、外では遊んでいるけど、親が手を出しているのだろうなという機会を見ることが多い。

だから、例えば寝返りうつときとか、例えば親御さんに子育ての講演会行ったときに私は言うのですけれども、目の前に物があつたとき、この資料もそこに出ていますけれども、目の前にあるときに、子供が取れへんところにある場合渡してしまうのか、あえて取れないところに置くのかによって、全然子供の育ちが違いますよというお話をさせていただいていて、取れないから取ろうとする、そこで集中力育つ、一生懸命見る、暴れる、暴れたことによって動く、全身使いますからね。そこを手渡ししてしまうと、もうそれで終わりなので運動しないですよ。

そこでついつい親は、泣かれたらもっと早く渡すから、泣いたらもらえるという学習をしてしまいますよね。

じゃなく、ほっといたら、泣かなくても一生懸命頑張るのですよ。うんうん言いながら。そのときに、近くに寄せてやるのがいいと思いますけれども。

という、その繰り返しが、毎日の繰り返しだと思う。

でも、親御さんは渡してしまうとか、外に出るのも言いましたけれども、安全に配

慮し過ぎて、遊んでいることが多いかなっていう気はしますね、お子さんを見ていて。

○梶木座長　　ありがとうございます。

赤ちゃんは変わらないけれども、大人の関わり方が変わっているということだったんですけれども、30年活動されている中で、大人の関わり方も、前はそういう失敗させてもみたいな親御さんの関わりがある方が多かったでしょうか。

○越智氏　　というか、子供と遊んでいることのほうが、多かったのかなと思います。幼児でも。

最近ほったらかし状態ですよ。関わり方ではなく、スマホ見てはるから。逆にこっちが怖い。もういいかげんにせえよって言いたくなる。本当に手やって、見守るのが親でしょうと思うのだけれども、スマホにかかってしまっていて、ほったらかしでけがして、というのは、現実にも目の当たりにすることありますけれども。

昔は離れながら見ているっていい距離感を保ってられたりとか、いうのは感じるものが、昔はあったかなと思いますね。数名の子供を連れて来られる方もおられましたしね。最近多いと二、三名の子供が年子でとか、児童館なんかに来られたりとか、全く産まない方もおられたりとか、一人っ子っていうのもあるので、その辺で出生率が変わっているのかも分かりませんが。

見ている範囲では、そんな感じですかね。答えになったかどうか。

○梶木座長　　ありがとうございました。親の取り巻く環境も変わって、子供さんへの接し方もちょっと変わってきているという印象ということですか。

○越智氏　　そうですね。世の中、とりあえず早く早く、早くできることがいいことなんだみたいな世の中になってしまっている、だから早くさせなきゃいけないと思っている。

でも、成功しかしてないと、崩れたときにとんでもないことになるよっていうことに気がついてもらわないといけないし、市長も前のときにおっしゃっていた、危険というのは、小さな危険を察知したりと、経験したから学べることであって、その危険

を排除することが一番危険なのですよと、親御さんの講演会でもお話はさせてもらいますけれども、そこをやっぱり、僕らがどうフォローしていくのかだろうと思うのですね。

○梶木座長　ありがとうございます。私もちょっと質問させていただいていいですか。

プレーパークとかもずっとされているということで、何か安全志向とか、今のお話につながるのですけれども、そういうところで工夫されていることってあるのですか。やはり大きな事故っていうのは避けなければいけないというのはあるので、ちょっとぐらいは避けたほうがいいというのと、大きい境目がなかなか分からないっていうのが、多分すごく不安だっていうところになるかと思うのですけれども、そのあたりはどんなさじ加減でされているのでしょうか。

○越智氏　これはかなり難しいことになるかと思えますけれども。やっぱり骨折とか、大けがで入院とかっていうのは、もうこれ避けさせなきゃいけないと。

ですからプレーパークで木に登ったときも、ほったらかしではなくて、下にマットが置いてあるのか、もしくは、支え上げないけど下で誰かがいるのかっていうのは違いますよね。

でも、補助の仕方として、皆さん木登りさせようと思ったら、押し上げるのですよね。それをしてしまうと、その子は登ろうとしている力をそぎますよね。落ちないように支えているけれども、登られへんねんやったら、あんたそこまでの実力やねんっていうことを感じさせる。

ですから、現場の先生たちによく言うのは、登り棒に登れないお子さん、どうしますかって。押し上げますと。そうですよね。でも、そうかなって。でも今の親御さんの事例を挙げると、ここにベルトをつけといて、上に滑車つけといて、こっち側へロープで引き上げているお子さん、いっぱいいますよって話をする。

大事なことは、節目をつくってやらなきゃいけないだろうと。昔は竹でしたからね。

とか、木が先細ぼっているから、下のほうが太かったから、そこで止まることはあったし、手がしけても木で止まっていたよね。鉄やからするっといきますよね。

その節目をどうつくってやるかだというふうに、スタッフには伝えてあって、節目をつくって、そこに足を乗せて登れたら、それは力があつたのだろう。でも、全面的にその、節目に力をつけてしまったら、外せと言ってあります。それは、お前に、力がないねんからしゃあないと。その経験をして、次の年どうなっているか、次どうなっているかを会得させないと、多分駄目だと思いますね。

○梶木座長　　ありがとうございます。なかなか経験値から分かることも多くって、大学生などがいきなりそういう現場に入っても、そういうのは体得してないでしょうから研修になるのですかね。その姿を見ながら、やっぱり先輩のそういうのを見て、何となく感じていくのかなと思いますけれども。

リーダー側もやはり、成長していかないといけないのかなと思いますね。

○越智氏　　そうですね。この前の議事録を見せてもらっても、学生さんにレクチャーする必要があるのかなのか、いいのじゃないかという意見もあつたと思うのですが、素でいくのもいいと思うのですね。でも、今の学生さん見ていたら、物すごい手を出されるのですよね。補助されちゃう。

最近の子供、実際にあつたことです。飯ごうで、子供に対してリーダーがレクチャーをして、紙芝居をしました。覚えたよね、やっpegらんって、できなかつたら子供たちが、ストレートに、あんたの教え方が悪いって、言った所に、出会いましたからね、違うグループで。そのリーダーさん必死になって、自分が御飯炊きましたからね。

という現状を見たとき、これは違うよなっていう。

だから、そういう体験をしながら、いや、違うのだよって言ってあげなきゃいけないんだろうと思うし、うち来たときも、とりあえず好きに関わってごらんって言いながら、うちのスタッフが声かけるから、止められても落ち込みなやっpeg。そこであなたたちはどう考えたのか、うちはどう考えた、その違いがあることでお互い話がで

きる、分かるやろっていうやり方での育て方をしようとしている。

○梶木座長　　ありがとうございました。

　　お願いします。

○芝田次長　　越智さん、ありがとうございました。

　　聞きたいこといっぱいあり過ぎて、どの角度からお聞きしたらいいのかと思いがながら、迷っています。

　　私の今の状況から、子供たちのことを聞きたいので。

　　まず、30年近くなさっているということと、プレーパークに関して、集まってくる子供の数、あるいは年齢的なものは変わってきているのか、ここ最近ですね。とか、あとは遊び方、先ほどもありましたけど、子供の遊び方、関わり方じゃなくて、子供が変わってきているのかっていうところは、漠然とするのですけれども、少し教えていただけたらなと思いますが、お願いします。

○越智氏　　実際、きっかけをつくってやらないと駄目なお子さんと、周りを見て入ってくるお子さんとあります。周りを見て入っていてやりたそうやったら、どうする、やるって声をかけて、やりたいって言ったら、やってみっていう話になるだろうし、それから、やっている遊びというのは、やっぱり小学校からの子は学校でやっている体育のドッジボールなんかとかね、サッカーとかやろうって、実際に広いところでやっています。灘丸山公園なんかでは。

　　それと、工作はもうちっちゃい子もやりたがるので、親御さんと一緒に、危ないところ見てもらっていますよ、うちもついてやっていますと。これは昔から変わらないなと思いますね。

　　それから、単純に穴、あけるだけ。砂を掘って、落とし穴を必死になってつくってみたりとか、というのをやっていたりとか、そういうのは昔とも、これは全然変わらないなと思いますね。

　　来る子も、これが楽しみで来ているよねっていうほど、同じ顔ぶれが来てくれたり、

友達引っ張ってきてくれたりはしているかなと思いますね。

だから、昔と大きく変わりましたかっていったら、来ている子供たち遊んでいる姿は変わってないように思います。ただ、昔より使っている道具はよくなっているよなと。

○芝田次長　私も同じことを思っていて、私はもう、基本子供は変わってきてないと思っているのですね。ただ、前回もありましたけれども、周りの環境なり、先ほど越智さんがおっしゃった、道具が変わってきている、どんどん遊びやすいものになってきている。だからそこに工夫はなくなっているというのは、それは感じることもあるのですけれども。

遊ぶときのための工夫っていうのも、大きな知恵になるのかなというふうに思ったりもするので。

いやでも、今のお話を聞いて、ちょっとほっとする部分があり、そしてまた、例えば大学生にしても、言えば10年前はまだまだ子供だったわけなので、大学生自身もそんなに、何か経験をしてきたわけではないとは思っているので、大学生にもいろいろ経験してもらいたいなというふうなことも思ったりしますね。

○梶木座長　ありがとうございます。前回、プレゼンテーションが、時間がなかったということで、今日、越智さんの話聞きましたけれども。

それでは、ちょっと今日の話題の方に移っていきたいと思います。

まず最初に、子供の安全な居場所づくりということが大きなテーマになっていますけれども、子供の外遊びのための安全な居場所づくりというものには、どのような取り組みが有効だと思いますかという問いを皆さんに投げかけつつ、澤井さんには人材、人ですよね、について、ちょっと御意見いただきたい。

それから、豊永さんには、場所について御意見をいただきたい。

山下さんには、空間について御意見をいただきたいという、まず3名それぞれどうでしょうか。考えていただいて、御意見いただけるとうれしいなと思うのですけれど

も。

まとまった方から、ということで。

いけますか。

○豊永氏 環境、場所ですよね。

○梶木座長 そうですね、場所がね。神社とか、寺院とか、そういうところが、神戸市なんかでもいっぱいあるじゃないかという話から、その場所について、ぜひお話、豊永さんにしていただければと思うのですけれども。

お願いします。

○豊永氏 前回もお話ししたように、灘区の一王山十善寺の境内にあるカミカ茶寮という場所についてお話します。

その場所ってというのは、やはりお参りに来られる方がいらっしゃる。誰かしらの目がある。私以外の目がある。あとは毎日登山、神戸市推奨の毎日登山の署名所でもある。朝はたくさんの方が、皆さん署名に来られます。そういういろんな方が、自然に来ている環境とか、場所というのを有効活用すれば、呼ばなくても誰かが見ているというところが私の中で見守りになるのかなと思います。

あとは、登山会の方たちが、毎朝境内をお掃除するのですね。

地域の方たち、道に落ちているごみ拾いながら歩いて来られる方もいます。美化をすることで、防犯面で守られる部分が出るのかなと思います。

○梶木座長 本当に、もう既に活動されておられる方の、見守りというつもりでされてなくても、人の目というのは、防犯カメラよりよっぽどという、自然な監視性ということかなと思うのですけれども。

この間、豊永さんが、何となく見守られているのだ、神社仏閣はというので、そういう雰囲気もあるんでしょうね、きっとね。

○豊永氏 やっぱり大人たちがお参りに来られて、手を合わす姿を見るというのは、すごく大きいと思います。

灘区にどれくらいの社寺仏閣があるのかなというのを地図で見たのですけれども、大体、灘区で約50ぐらいの社寺仏閣がありまして、それが使えるかどうかは別として、そういうところが居場所になれば安心とか、安全という面で、誰かが見ている。もしかしたら、そこは利用できるのではないかなと思っています。

○梶木座長　ありがとうございます。

そういう人が集まっていくところというのが、定期的集まるという場所とか、お寺とか神社とかそういうところにあるのかなとも思いますし、犬の散歩とかされている方も、朝晩におられてそういうところもあったりするのかなですけれども。

やはり、人の目というのは、安心感にもつながっていくところでしょう。

では、澤井さん、いけますか。

○澤井氏　すみません、どちらかと言うと、場所のことを考えていたので。何となくで。

○梶木座長　どっちも言ってもいいです。

○澤井氏　越智さんも先ほど言われたのですけれども、見守る側にも、うちは特にこれをしてくださいとかというのはつくってなくて、人それぞれみんな違うので、みんな違ってみんないいじゃないですけれども、それぞれこれが危険だって思う、センサーが違うと思うのです。

自分は危険だと思っているのに見守らないといけないとか、私がここは見守ってくださいというから、じゃあ見守らないと、自分は危険やと思っても見守らないといけないのだという思いでやるのも、子供と接するのも、それは違うと思うので、本当に個人個人に任せていて、例えば親子クラスで参加されるお母さんたちも、ちょっと手を出し過ぎな方もいらっしゃるけど、それはその人のセンサーであって、ほかの参加している方とか、私とか、スタッフの見守り方を見て、ああいう見守り方もあるのだという、実体験というか、そこでちょっと学んでもらうというか。

私たちも、あっ、あの人はこれが危険だと思うのだとか、逆に勉強させてもらって

いたりして、何でもっと人材は、特に何かこういう人がいいとかというのは、すごくなくて、すみません。

ちょっと場所は分からない。豊永さんが言われていた、いろんな方に見てもらおうというのは、すごく私たちも六甲縦走の麓で遊んでいるので、山登りの方がすごくいらっしやったりするので、いろいろ声をかけてくださったり、時にはお叱りの言葉もいただいたり、それは私たちではなく、子供たちも同じように感じていて、それをじゃあどうしたらいいとかという話もすごくしているので、いろんな人から見てもらおうというのは、すごくプラスになることだと思っています。

この次第をもらったときに、最初に外遊びの安全な居場所づくりという言葉にすごい違和感があって、この間の、1回目終わった後に、梶木先生とちょっと話をして、私、何かこれにすごい違和感がありますという話をしていたら、梶木先生が、「安全じゃなくて、安心よね」って言われて、ああ、それだと思って。外遊びに安全は必要ないなと思って。

ただ、本当この世の中、防犯面とか、そういうのが、昔と違ってきて、強化しないと、安心して遊べないというのは現実なので、安全じゃなく、安心を考えていった居場所づくりがいいなと思いました。

あと、越智さんの話にも出ていたのですけれども、子供は本当に変わってない。私が一番変わったなと思うのは、環境、本当に危険を排除し過ぎ、整備され過ぎて、アスファルトでしか遊んでない子がすごく多くて、やっぱりアスファルトしか遊んでない子が山道をいざ歩こうと思ったら歩けないのですね。でも、何回か歩いているうちに、歩けるようになるのです。

だから、初めから整備し過ぎないというのが大事かなと思って。

最近、二、三年前、もっとかな。赤ちゃんがつかまり立ちしたときに、転倒防止のまくら、私、あれ見た瞬間、これは子供の成長を妨げているなとすごく思って。あれがあったら、こけても痛くないということは、受け身をとることを覚えな。大人も

そうですね。こけて痛い思いしたから、手をつこうとか、そこが出るのに、守られ過ぎたら、どうしても危険な目に遭ったときに、対処する仕方を学べないなと思いました。なので、本当にありのままの自然とか、場所が子供たちにとって、すごく成長する場所だなと思います。

以上です。

○梶木座長　いろいろ貴重な御意見、本当にうんうんと思いながら聞いていました。

いろんな人から見てもらうって、すごく大事だという、さっきの豊永さんと同じ話でしてもらって。

センサーが違うというのもすごく大事で、だからこそいろんな人間がいて、遊び場にリーダー一人でいいわけではなくて、それは安全の規準を見守るリーダーだけではなくて、合うか合わないかもあって、子供と大人でもすごい相性あるので、相性ということからも、このリーダーはいいけどこっちは嫌いとか、そういう感覚も何となく身につけていくのって、大きくなるためにすごく大事な。この人とはここまで、この人とはもうちょっとここまでみたいだね。こっちにはこう言うという、こっちにはこう言うみたい、そういうところも遊び場って学びやすい部分かなと思っています。

それから、環境の話で整備し過ぎているというのは、本当にそうだなと思ひまして。何でもかんでも、出来上がったものになっちゃっているんで、つくり替えたり、余地をもうちょっと残してもらえたらいいのだけれどもと思うので、公園に遊具たくさん置かれていますけれども、この遊び方しかできないみたいな遊具になっちゃっていて、でも、子供はその上手なので、いろんなことをして遊ぶ。それでけがをした、そんなことは想定してなかったとよく言われるのですけれども。

滑り台は上から下りるだけではないですよ。下から登ったり、さかさま向いて下りたりって、そんなのが多分遊びなのですからけれども、大人が普通に考えると、上から並んで下りましょうとか、順番に下りましょうになっちゃうんですが、遊びの中では

そういうこともいろいろ起こっているんだって思います。

山下さん、お待たせしました。

○山下氏 とんでもないです、ありがとうございます。

○梶木座長 お願いします。

○山下氏 皆さん、今日も貴重なお話ありがとうございます。最初の事例紹介の、できないという気づきであり発見でありというのがすごく印象的だったのと、子どもは変わっていなくて大人が変わったという言葉が、皆さんと一緒に、非常に理想的でした。今日もよろしく願いいたします。

規制はサンキタ広場やサンキタ通りといった、本当に独立して中心市街地のほうによく使わせていただいているものなのですけれども、今安全よりも安心という、重たい言葉をいただきまして、まさに中心市街地には車を止めまして、車を制限いたしまして、安全な場所は非常に増えておりますし、神戸市さんだけでなくいろんな地で、中心市街地でこういう車が導入をしない場所を増やしていくという動きは、世界中の都市で起こっているのですけれども。

じゃあ、ここが安心かって言われると、どうなのだろうとか、やっぱり中心市街地、サンキタ広場でいえば三宮駅前ですので、本当にいつ行ってもたくさんの方がいるという状況です。こういったところで、このたくさんいる人たちがちゃんと、せめて近くの人にはちゃんと配慮があるとか、気持ちが減入っているであろうかとかって言うことに対しては、本当に疑問とか、不思議に思うことも多々あるのですけれども。

私は、神戸市様は政令指定都市ですけれども、政令指定都市、人口が非常に多い街の割には、実はイヤホンをしていらっしゃる方がかなり少ないというふうでして、イヤホンをされていないということは、音で気づける状態ですので、そこに少し希望を抱いたりしているのですが、また、まだこれからなのですけれども、こういうたくさん人がいるところで、その人たち同士がお互いに配慮し合うような関係性づくりを、どういったプログラムであればできるのかなということを日々考えておりますし、あ

とは、前回もそうだったのですけれども、皆様の活動本当にすばらしくて、そこに参加されている方よりも、そこに参加されていないといたら情報として存じ上げない方々に対して、こういったまちなかの不特定多数の方が通りかかる場所は、いろんな方にもお伝えできますので、そういったすばらしい活動を皆様といわゆる中心市街地の景色とまでは言いませんけれども、もっともっと、知っていただきたい方に伝え、お届けするような機会を、どうしたらできるだろうと。

今日、私の（Zoomの）背景サンキタ通りなのですけれども、車が通らないってだけで、安心にはまだそこまでなってないかもしれませんが、見えております親子が手をつないでおられません、お嬢さんがきょろきょろしながら、とっても楽しそうに歩いていたのが印象的で写真を撮らせていただいたのですけれども、まず、車が乗り入れないことで、安全にはなるところがたくさん増えてきた。次に安心という意味では、人の目であったり、いろんな人たちに守るべき子供たちに関心を向ける機会をつくっていくということを、今日も皆様と様々な協議させていただければと思っております。よろしく願いいたします。

○梶木座長 ありがとうございました。

政令市の中で、神戸市がイヤホンをしている人が少ないって、そういう目を見たことがなかったので、すごくそうなのだと本当に思いながら。

スマホを見てイヤホンをされてしまうと、もう本当に一人の世界に、周りにたくさん人がいても、もう没入空間に入ってしまったっていう人も多かたりするのですけれども、それが他都市に比べると少ないのかな。ちょっとそういう目を見たことがなかったので、見てみたいなと思いますけれども。

それ以外でも、車が通らないって、ウォークブルシティを目指して、中心市街地、そういうところを目指していますけれども、やはりその車にまでも目を光らせなくてもいいっていうのは、すごく安心して歩ける場所だになっていうのは非常に思いますし、いろいろ中心市街地、あちこちで歩道が広がってきているので、安心して歩ける。で

も、そのときにやっぱり、親子で歩くときにお母さん、お父さんがスマホを見るのじゃなくて、やっぱり子供に目をいっているっていうのが理想なんじゃないかなって思うのですけれども、なかなかスマホというのと、環境で変わってきているっていうのは、そこが大きいのかなって。でも、もうなくしていくこともできないしと思っております。

今御意見をいただきましたが、越智さん何かほかにありますか。大丈夫ですか。

○越智氏 いや、後でします。

○梶木座長 じゃあ、丸山さんとか芝田さんとか、今の。

○芝田次長 いいですか。ありがとうございます。

先ほど滑り台の話聞いて、ちょっと胸が痛いなと思いました。そうですね、学校では、必ず上から滑って下りなさいと。逆上りは禁止とかね。それは、どうしてもけがということがあったり、多くの子供たちが使うので、逆走ということは一番の危険なところというふうに思うので、ちょっと心痛いなと思いながら聞いていたんですけども。

私個人的なお話を、立場もあるのですけれども、ちょっと越えて、今日も先ほどのお話の中で、例えば豊永さんがおっしゃった、自然に人が集まってくる場所っていうふうなところは、やはり多くの目が自然に集まるっていうのが、これはとても今回の一つのキーワードかなというふうに思っているのですね。

どうしても学校からすると、きちっと見守る人を配置しなければいけないとかですね、何人、あるいは先ほどもありましたけれども、どここの遊具には誰が見るとかっていう、役割とかも決めるという、どうしてもそのような方向からものを考えていってしまうのですけれども、先ほど豊永さんがおっしゃった自然に集まるから目がたくさんあって、いろんな見方をするというふうなところ、これはとってもすてきなことだろうなというふうにも思いましたし、それから澤井さんがおっしゃった、人によってセンサーが違うっていうのは、いやそうですねって。例えば、危険というのか

な、いろんな遊び方にとってみても、一つのボールでも人によっていろんな遊び方があるわけですから、それをじゃあこのボールはドッジボールをしますよじゃなくて、いろんな見方ができるっていうことも、とてもすてきなことやなど。

そして先ほどおっしゃった、安全な居場所っていうのは違和感があって、いやいや、これは安心だっていうところで、落ちたというようなところも、私もすごくそのことを感じました。

立場上、安全なっていうようなことを考えるので、どうしてもこれは、現実的には、どうしても安全を優先してしまうのですけれども、あえてこの場でお話させてもらうのは、安心なっていう、僕は一定、理想を語り合う場であっていいのかなというふうに思うんですね、この場ではね。現実ばかりで話していくと、あれ駄目、これ駄目ってなってくるので、あえてここでは、理想論を皆さんと協議することで、こうあればいいよねっていう話で、そうあるためっていうのは、この一歩先はまた、その後、考えればいいとは思うのですけれども。

ぜひ夢じゃないけれども、理想を語り合える時間であればいいなっていうようなことも、今ちょっと感じた次第です。

○梶木座長　　すばらしいですね。

○芝田次長　　ありがとうございます。

○梶木座長　　いや、やはりそうですよね。あれ駄目、これ駄目って言っていたら、本当にぎすぎすしちゃいますし、大人ももっと外に出て遊んでもらうと、人の目も多くなるので、自然監視性という言葉があると思いますけれども、自分の居場所という意味で言うと、ここが居場所になっているのだよっていう領域性があったり、自然監視、人の目が行き届いているっていう、それは大人だけではなくって、子供同士でも、人がいるところのほうが、けんかが起こるとか、そういうのはまたいろいろあるかもしれないですけれども、いけたら楽しそうにも見えるし、にぎわいにもなるし、安心できるな、お兄ちゃんお姉ちゃんがいつているから安心みたいな、そういう遊び場も

あるのかなと思ったりします。

丸山さんいかがですか。

○丸山副局長　　すごくいろんなところで気になるワードがいっぱいあるなと思って、今、まとめきれないのですけれども。

おっしゃっていただいたように、やっぱり理想を語り合いたってすごく思って、お話聞いている中でも、さっきのセンサーが違うから、山登りの人に会って、声かけてもらう人もいれば、お叱りを受けることもあると。

それだと親御さんも、これぐらいはいいわって思っている親御さんもいれば、もう、絶対、安全に配慮してくださいという親御さんもいらっしゃるだろうなって。そんなのどうしているのだろうか、やはりちょっと行政の立場だと、この施設内ではこのルールでとか、この公園はこうでとか、そのルールとか、みんなが安全に使えるようにと思ってしまいがちなのですけれども、そこは、環境が整備され過ぎていて、危険を察知とか、対処する能力が落ちているかもしれないので、それを整備され過ぎていからこそ、我々が安心な形でそういう環境を、どうやったら今から子供たちに提供していけるかを、理想を語りに、いろんなアイデアをたくさん、皆さんからもっと聞けたらなと思います。

○梶木座長　　ありがとうございます。理想は語り合しましょう。ぜひとも。

一通り今のお話を聞いたのですけれども、次の話題に移っていきたいと思います。

今日の次第のほうに書かれていますけれども、2番目の議事ですね、学校、行政、地域、NPOなどの役割・連携ということですが、ここに家庭を付け加えたいなと思っております、それプラス、いろいろあるのですけれども、「など」に入り過ぎてもあれなんですけれども、企業さんですとか、先ほどから出ています大学生とかいうのもあるので、大学とか、そういう役割とか連携ということについて、お話を進めていきなりたいと思います。

これまでの皆さんの活動の中で、こういういろんな役割を担ってくださるところが

あるのですけれども、どういうこと、期待したい役割とか、こういうことを、例えば学校が担ってほしいとか、家庭では、これよろしくみたいな、そういう何か思っておられることがあればお話をさせていただきたいのですけれども。

誰からいきましようか。いける人から順番にということで、今回は、あなたはこれっていうのはなしなので、誰から、どれでも、全部でもいいのですが。

豊永さん、いけそうですね。うふふって顔されていますが。次がいいですか。

○豊永氏 何でもいいです。

○梶木座長 では豊永さんから行きましようか、お願いします。

○豊永氏 先ほど、家庭というのがあったのですけれども。

大人は子供の鏡であるように思っております。なかなか難しいのですけれども、私はともに楽しむ、子供とともに楽しみたいなと思っております。なので、なかなか親は、ある程度の距離感を持って、先ほども見守っている、それもいいかと思うんですけれども、遊びをなかなか知らない大人も増えてきているのかなというの感じます。

知らない、土が汚いって言ったりするのですね。親も、そのときにやっぱり、そうかな、汚いかなとか、虫嫌い、私は嫌いなものだけれどもじゃなくて、親も虫や自然と戯れて、親も楽しむ会っていうのができたらいいなと思っております。それが家庭ですね。

あと地域なのですけれども、先ほど言った神社、お寺、そういうものの協力があることで、自然と見守りができるってところの連携が、協力してもらってできたらいいなと思っております。

学校なのですけれども、小学校の校外学習で、私たち一王山十善寺に3年生のときに校外学習にやってきます。多分、3年生が初めだとは思うのですけれども。そのときに、去年、十善寺のお寺の住職と、茶屋の、私は森の自然のこととか、裏山のドンダリのことをお話しさせてもらいました。そうすると、子供たち、ドンダリ拾いたい

からって、放課後やってくるのですよ。

そういう、学校側は、やっぱりこういう遊び場があるよ、こういうところがあるよっていうふうに、学校側から連れてきてもらって知るというのもいいなと思います。

それがさっき言った50ぐらいある、灘区の神社や仏閣で、そういうお寺を巡る、神社を巡るという校外学習があってもいいかなと思います。

あとはやはり登山会ですが、ちょっと特色があるのですけれども、一王山登山会の支部が、ちょうど一王山の茶屋の前にあって、署名所なのですけれども、ここの関わりというのが、子供、大人だけでなく、高齢者との関わりですよね。それが自然にできるのではないかと考えています。

今、放課後にフォーカスしていますけれども、登山会は朝なのです。朝早くからすぐくにぎわいます。できれば子供も、朝活をしてほしいなと考えています。

一王山には今、子供名簿もちょうどあるのですけれども、もっと強化して子供登山部みたいなそういうものをつくって、何か楽しみが、朝の楽しみがあってもいいのかなと。学校に行く前に、山に行く、友達と会える。そうするとおのずと早く寝るという習慣がつくかなと思います。

以上です。

○梶木座長　ありがとうございます。すごくアイデアもたくさんあって、芝田さん、何か言いたくなりませんでしたか。大丈夫ですか、ちょっと言われますか。今はやめてきますか。分かりました。

どうぞ、越智さん。

○越智氏　物すごくいいお話を、ずっと聞かせてもらっていいなと思っていて。

今出てきました、親も楽しむし、今の人たちが遊べてないっていうところであったりとか、学校の先生も遊べてないですよ。

うちのスタッフが、学習指導要領の中の生活科で、泥団子のつくり方で、講師に実は教育委員会の方へ行かしてもらっているのですけれども、団子につくれない先生た

ちがいて、土を選べるということで、先生たちにもそういうことをしていかなきゃいけない時代になっているのだろうなっていうのも感じたりします。

だから今のお話、子供も大人も大学生も一緒になって遊ぶという機会をつくるっていうのは、とっても大事なのだろうなっていうことと、あと学校、校外学習へ連れて行って、そこで知るっていうパターンと、それは教育で教える側と思うのですが、今先生とお話ししていて、うち、児童館の方もやっていますので、ドングリマーケットっていうのをやっています、当初、こうなるとは思わなかったのです。

うちのスタッフがドングリを集めてきて、それをお金にして、子供たちの商売じゃないですけど、子供たちが物を作り売りたいなことをやっているのですけれども、それが功を奏したのか、地域の公園にこんなドングリがあるよとかっていうのを、子供たちが情報を集めてきたのですね。親御さんも集めてきたのですよね。じいちゃんばあちゃんも探してきたのですよね。

ということで、ものすごく広がったのですね。というふうに考えると、逆のパターンとして、学校側がこの辺でこんなことができると、子供から情報集めたら子供たちは地図をつくるのかすると、それだけで学習になるのかなと。今の主体的、対話的、深い学びにつながるかなと思ったりもしたのですね。

余計なことを言ったかもしれませんが、そんなふうに感じたりとかしました。

それから、さっき言いませんでしたけれども、安全・安心という言葉の、そこまで深く考えてなかったなっていうのは、ちょっと自分自身がやりながら、情けないなと思って、安心というのは大事だなっていうことと、先ほども言われました、うちも学生のスタッフさんに対して言っていることは、自分で考えて動かすことと、待つことと、もう一つは、うちは最初何も言わないよ。好きなようにやってくれ。何かあったときに、うちが止めるからって言ったのはなぜかという、こちらから指示をすると、それしかできないってさっきもおっしゃっていましたが、そのとおりだと思います。

逆に、そのスタッフが、僕らとは違うことをやってくれることになると、プラスになることがあるので、逆にそこは認めてやりながら、スタッフを育てていく、人を育てていくことがとっても大事だなんていうふうに思っていて、ということになります。

だから、それぞれの子供をどう受け取りながら、遊びをつくっていくのかになるのかなっていうふうに思ったりもしています。

それと、もう1個。これは後で出てくるのだろうと思うのですが、さっきの、滑り台逆走された駄目だよとか、整備し過ぎて言うんですが、神戸市としたら、訴えられますものね、事故があったら。それを避けたいのですよね。となると、そういう認識をどういうふうに変えていくのかっていうことが、さっきの理想の話ですよ。

神戸市の市民の親御さんたちに、いや、それは本市はそう考えていて、それがないと、これは育たないのだよっていうアピールを、ごめんなさい、大学の先生とかデータを取っていただいて、そういうのをしていただければ、神戸市全体として、そういうふうには持っていければね、理想の話ですけれども、なれば、先生たちもやりやすいだろうと。

結局は、先生たちも身を守らなきゃいけないような状況をつくっている、親御さんたちがギャーギャー言うから。僕らは、そんなの違うやんと思っている人たちがやっているのだと。さっきは、こちらに来られた方は、それを分かっている方々。そうでもないお子さんにどうアピールするかっていうことを考えなきゃいけないのだろうなと思いますので、そこら辺を、さっきの連携だと思っただけですけども、大学の先生たちも、そういうデータとか、そういうのを発信してもらい、神戸市も思い切ったことで、こういう子育てにしようよっていう話で、僕もさっき言いましたけれども、子育てしている、小さいときは大事なのだってことを、今、一生懸命頑張ってもらっているのですけれどもね。こども家庭局、丸山さんには頑張ってもらっているのですが。

そこをどういう形で発信していくかっていうのが、大事なのかなっていうふうに思いました。

○梶木座長　　ありがとうございます。リスクとハザードの考え方ですよね。

小さい子、リスクは置いといて、ハザードはちゃんと取り除くという、この区別をちゃんとしないと、全部がハザードになってしまうので。そうすると、もう本当、安全第一みたいな感じで、駄目駄目だという。そしたらもう、何もしないが一番になってしまうので。極論いくと、そういうふうになってしまいますから、リスクとハザードのことをしっかりと分けて発信をして、それを受け止める親側、地域だったり、大人側の教育というか、啓発もすごく大事になってくるのだろうなと思いますね。

澤井さん、いけますか。

○澤井氏　　すみません、私、すごく現実的で。

第1回目の話を終えて、いろいろ考えて。小学生の遊び場がないなって、すごく感じて、乳幼児さんは保護者の方がリサーチして見つけて、遊び場に来てくださることがあるけれども、小学生って本当行動範囲も限られているし、場所が少ないので、例えば、森のようちえんの立場ではなくて、親の立場、自分の子供を育ててきた立場から言うと、公園、まず遊具は小学生はほぼ遊ばないですよ。乳幼児さんが遊ぶようにつくられていますよね。

ボール遊びする場所も、小学生がいっぱい集まると場所がなくなる。たくさんの子が集まり過ぎてなくなって、そういう子はどこで遊ぶのかっていったら、遊具で鬼ごっこを始めるのですね。

私は自分の子を育てて見ているので、遊ぶ場所がないのだから分かって見守っているのですけれども、乳幼児さんを連れてくるお母さんからしたら、自分の子は滑り台滑りたいのに、小学生の子が反対滑りして、思いっきり走ってぶつかったら危ないとかっていうのがすごく目につくと思うのです。

なので、こないだ芝田さんが言われていたみたいに、まず校庭で遊ぶのを充実させてほしいなと思って。

私この間、言っていたのですが、うちの子のときは、学校の校庭では遊ばせんだ

ったんですね。うちの子は、じゃあどうやって遊んでいたのかなってなると、今習い事や学童に行く子がすごく多くて、結局、公園へ行っても誰もいない。友達もいないってということで、遊ぶ約束もしにくいし、遊ぶ子もいないっていう小学生生活だったのです。でも学校だと、約束、この間芝田さんも言われていたのですけれども、習い事へ行くまでの時間にちょっと遊んで帰るとか、そういうのがすごくしやすいなと思って。それで、そこに大学生が入ったりとかっていう活動をされているので、そこをちょっと充実させて、親としても、学校という場所で遊んでいる、放課後、学校で遊んでいるって聞くと、すごい安心感があるんですね。

そういう場所がちょっとずつ増えていけばなと。梶木先生もこの間、学校で子供を取り込み過ぎているから、公園とかで遊ぶ子がいないのじゃないかっていう話もあったのですけれども、まずは安心する場所で、小学生が思い切り遊べて、ちょっとそこが充実したら、豊永さんが言われていたみたいに、校外学習で先生と一緒に、この校区にはこういう遊べる、大人が見守ってというか、大人の目があって、安心して遊べる場所がたくさんあるって、ここではこういう遊びができるよっていうのを、ちょっとずつ浸透させていくのはどうかなと。幼児より小学生のことを大事に考えたいなと思いました。

○梶木座長　　ありがとうございます。

校庭って本当に貴重な小学生の遊び場になりますし、広いですし、ボール遊びもしてもいいし、ということで、ただ学校終わるのが遅いのですよね。

神戸市の学校の時程表を見ても、1年生でも毎日5限目まであるのですかね。高学年になると6限目まであったりして、そこは1日4時間目で終わる日を、1週間に1回だけでもつくってもらえたら、ぐっと遊べたりするのだと思うのですけれども。

何かこう、もうちょっとめり張り、毎日5限目じゃなくて、というようなことを、低学年の間からとかできないのかなと、昔から私は思っているのですけれども。

ほかの自治体、そうやってできているところがあるので、神戸市も何かモデル校と

か、そんなここで言うといけないのかな、すみません。

いかがでしょうか。

○芝田次長　モデル校はちょっと横へ置いといて、いいですか、ごめんなさい。

先ほどいろいろお話聞かせていただく中で、豊永さんもおっしゃったのですけれども、私は大人がともに遊ぶって、とっても大事なことやなって。見守るとか、そういう、それも大事なのですけれども、一緒に遊ぶのが一番自然な形なのだろうなというふうには、すごく思いますし、確かに校外学習へ連れて行ったときに、ここで学ぼうとしているのやなっていうようなことが分かって、結局、子供たちは、知らないのですよね。

じゃあ、誰が教えるのかっていって、教えることがいいのか、それが口伝えで広がっていくのが、あそこであんな遊びしているでっていうのが、子供同士で、自分も行きたいなと思って行く。それが自然発生的になればいいな。

でも、知らなかったらどうしようもないので、何かで伝えていくすべはないのかなというふうなことも思ったりもしましたし、そやなど、すごく思ったことがあって。

例えば、澤井さんおっしゃった、公園で小学生がボール使ったり、走り回ったりというのは、確かに学校の運動場でも、思いっきり遊ぶ、ボール使う。そうじゃない遊びは、公園のほうでという、そこは一定、すみ分けとかもできれば、運動場はもう大きいので、思いっきりボール蹴ったりとかという、蹴ったらあかんのかな。それもいろんなあれがしましたよね。

ここはもう理想を語る場ですから。思いっきり遊んでいいと思うのですけれども。

一定のすみ分けも、自然にできていけば、遊ぶ場があれば、もちろん運動場で遊んでというようなことにもなっていくのかなというふうにも思ったりもするので。

そして、先生おっしゃった時間のことですよ。これは十分、今後考えていく余地はあると思っていますし、実際教科指導課のほうで、この12月から調べてきた内容では、今年度、授業時数も大きく見直しているのです、時数はどんどん減っていく方向

で、そして時間的にもゆとりをもって、放課後の時間も使えるように。そして、本当にそうですけれども、その時間をぜひ地域に帰っていただいて、そこでいろんなことを、もう習い事のためにではなくて、自由な前回ありました「退屈」というキーワードがあったかと思うのですけれども、退屈する時間をあえて生み出すことも、できていくのではないのかなというふうに思いますので、それは今後、学校はそっちのほうに向いているということも、ぜひ御理解いただけて、一緒に考えていきたいなと思います。

○梶木座長　ありがとうございます。先生方の働き方改革もありますし、学校の校庭の在り方も、また今後考えていくというのも、必要になってくるのかなと思ったりします。

山下さん、いかがでしょうか。難しいですか。

じゃあ、越智さん、お願いします。

○越智氏　公園のことなのですけれども、うちの孫が西灘小学校に行って、その南側に公園があるのですよ、西灘公園。あそこは子供が遊んでいますよ。ボール使っている場所と、そうでもない場所に分かれて遊んでいる子と、鶴甲とも絡んでいるのですが、鶴甲公園というのを整備していただいて、幼児、乳幼児が遊ぶところと、ど真ん中に何にもない。そこでも親子でサッカーやボール蹴り、遊んでいたりと、区分けをして公園を整備して、地元がかなり頑張ってください。反対運動もあったのですけれども、神戸市と共同でそういう公園をつくられているので、放課後、結構いますし、土曜、日曜、親子連れで結構遊んでいる。両方とも見ていて、いいなっているところがあります。

学校は開放してくれればすごくありがたいし、こども家庭局のほうでは、多分のびのびかな。ただそれが週一回なのですけどね。それは厳しいと思います、やり方がね。

芦屋市さんは毎日やってはるのですけれども、その価値があるのですけれども、それができれば、今言いました大学生さんが来ていただいて、そういうふうになれば、

もっともっと面白いのだろうなっていうふうには、思ったりもしますので。そこが大事なのかなというふうには、思ったりしますね。

○梶木座長　　ありがとうございます。

今そういう意味では、ボール遊びができない公園ばかりだという、子供からの意見なんかも、結構マスコミでも取り上げられたりとかいうので、地域の中の、一番学校に近い近隣公園クラスの大きさのあるところなんかで、ボール遊びできるというよなところも、地域がよければそういうのができるようになってくるので、乳幼児さんとの使い分けというのは、時間で分けるとか、気持ちで分けるとか、公園というところは、誰もが行って遊んでいいところなので、分けるのが本当にいいのかどうかというと、思いやりラインでも引くということを学ぶのも、重要なところかなと思ったりもしますので、そのあたりは地域の環境で、随分変わってくるのかなと思いますけれども。

要するに、寛容性が非常に重要になるのかなと思います。

皆さん、丸山さん、何かありますか。連携の話。

○丸山副局長　　そうですね、学校の校庭の話も出て、澤井さんからは、お子さんの習い事とか、学童へ行く前にちょっと遊んで行けたらいいのになって。そこに友達もいたらなお子供たちは楽しいのだろうなと思います。

少し前に、我々で学童に通っている子供たちにアンケート、子供たちの声は一体どうなんやろうというので、この前、見てみたら、2,400人ぐらい回答してこられた中に、もう1,000人ぐらい、一番トップに、何がもう少し学童でほしいかといったら、公園とか、外で遊びたいって。やっぱり子供たちの意見もそういうことなのだと思ったので、何かそういう、外でも少し、近くに公園があって、行けるところもあればそういう環境じゃないところもあるので、先ほど越智さんからもありました、ルールを作りながらうまくやっているところもあるので、地域ごとによって、いろいろあるところとないところって、ほかに活用できる神社仏閣のほうに行けるようなと

ころもあるかもしれないので、何かうまく地域の、豊永さんが言っていたような、自然に見守りがあるところに行くのもいいし、何か学校を使うところがあってもいいし、何か選択肢がいろいろあったら、理想なので、子供たちにとって選べる。その情報も子供たちは知っていて、今日はここへ行こうとかというのが、もう少し自由に選べるようになったらいいかなと感じました。

○梶木座長　ありがとうございます。

それこそとかという、ありましたけれども、そういう意味では、もう帰っておいでと言われたら帰るみたいな、そんなのがあって。今、新たな形で、プレイストリートというので、これは警察ともまた協議が必要になる話だと思うのですけれども。

道路を歩行者天国みたいにして、その日はそこで遊ぶみたいな、そういう取組なんかを地域でやっているところなんかもあるので、車の量だったりとかも関係すると思うんですけども、都心部でああいうウォークブルシティを目指しているのであれば、副都心的なところで道路をちょっと封鎖して、人工芝敷いてみて、遊んでみようとか、道路に絵を描いていいよとか、そういう公園じゃないところでも遊んでみようみたいなね。

家の前で遊べるなんていう経験ができるって、すごいわくわくしたりするかもしれないので、見えるところで子供たちが遊んでいるのを見ると、大人の人たちもいいよね、子供の声がするまちって言って。騒音というのは、多分知らない子が大きい声を出しているのであって、いやだって思うかもしれないですけども、自分の知っている子であれば、何かほほえましいなとか、何しているのとかって声をかけやすかったりするので、地域の中で、一人でも知っている子が増えていくような仕掛けというのが、大人の寛容性をもっと広めていくのかなと。理想を語っていいのであれば、そういうことなのだろうなって思います。

澤井さんおっしゃっていたみたいな、お叱りを受けるということもあろうかと思いますが、そういう大人もいるということも大事ですよ。

叱ってくれるのならまだいいのですよ、通報されるよりね。ということで、それし
たらあかんでって言うてもらふことも、やっぱり大事なことだなと思いますね。

山下さん、戻られましたかね。山下さん、いかがでしょうか。

○山下氏 お騒がせいたしました。戻りました。

すみません、ちょっと、ここ10分弱お聞きできてなくて恐縮です。また議事録で
拝見したいと思います、よろしくお願いします。

私からは、皆様にあえて御質問させていただきたいのですけれども、遊び方を知ら
ない。遊ぶことをって、私も子供のころ、めちゃくちゃよく遊んで、木登りとかして、
たくさん遊んでいた世代なのですが。そういう意味では、本当に環境が変わり、大人
がいろいろ変化の激しい時代かなと思っている中で、逆にコミュニケーションの機会
として、今おっしゃった、知っている人が一人でもいるということは、本当に大きな
チャンスだと思いますので、まわりしろのデザインの一つとしてスポーツやアートと
いったものを中心に据えて、コミュニケーションの機会を図っていこう、スポーツも
ですね強い弱いということで、競技というだけではなくて、コミュニケーションのツ
ールとして捉えていこうみたいな考え方も、まちづくりのほうでは最近、そういった
話が増えてきているのでも、皆様の印象で、思い出とかでも結構ですので、アートと
スポーツでの、要するにスポーツなんかですと、体育館とか、コートとか、要するに
安全で、安心かどうかはまた別の議論かとは思いますが、フィールドとして確立した
中で、その中でいろいろと競技的なものというだけでなく、体を動かすということを通
して、遊びの部分を増やしていける機会があるのかなと想像しているのですけれど
も。

ご提案とか、思い出とか、印象的な出来事とか、教えていただけたらありがたいな
と思って聞いておりました。

よろしくお願いします。

○梶木座長 ありがとうございます。楽しそうな話題ですね、どうでしょうか。

澤井さんからいけそうですね。

豊永さんからですか。いけますか。お願いします。

○豊永氏　六甲山がありますね。ぜひ休みの日に親子で、六甲山に行くのはどうだろうかと思っています。

私、茶屋をしているのですけれども、以前もお話したかと思います。六甲山系には幾つもの茶屋があります。ぜひ、子供の茶屋に行く機会、茶屋が拠点となる機会を設けてもいいかなと思います。

例えば、あるときは茶屋が子供の居場所、休憩所になってもいいかなと。イベントをする中で、それこそアートや、虫や植物のイベント、自然の中にアートがあったりする中で、六甲山の茶屋は最大限に活かせるのではないかなと思っています。

一王山も、実はミニ88カ所があります。そこで子供たちの森の美術館というのをしたことがあります。

自然の中にアートをするっていうのは、すごく、卓上では得られない、室内では得られない開放感もあって、体を動かしながらアートができるという。もっと茶屋の活動であったり、もちろん六甲山とミーツアートというのですかね、そういうものもあるのですけれども、何かもう少し茶屋の活用をしながら、茶屋が、児童館になる日とか、例えば茶屋が、子供の休憩所になる日っていうのを設けながら、自然の中で遊べる機会があるのではないかなと思います。

まずはそれを知ってもらうということも大事ですね。

あと、もう一つ、これは違うかもしれないのですけれども、学校へ行かない、行けない。その子たちが、どこに行くのか、どうやって遊ぶのかということも考えたいところですね。もっと自然の中で身を置いて、過ごしてほしいなと思っています。

○梶木座長　ありがとうございました。茶屋が児童館になる。面白いですね。なんかそういうスタンプラリー的なものもあっても面白そうですし、なんかいろんな、そこにスペースがあるということで、人がいれば、子供たちがいたら、いつでも同じ人

がいるっていうのは、すごい安心感になりそうですね。

澤井さんいかがですか、何か経験的な。

越智さんからですか。

○越智氏　それって、日曜日はオーケー、土日オーケー。

茶屋に行って、いや、僕らも結構、六甲山登らせているのですよね。でも、茶屋に通るのですけれども、さけていたりするのです。普通の方がいたら、子供がいたら邪魔になるやろなと思って、つつい。

○豊永氏　それはやっぱり、これから交渉ですよ。

○越智氏　ですかね。オーケーならば、別客がいてもいいだろうなと。

○豊永氏　そういう使い方を提案。

○越智氏　どうしても僕ら子供が行っちゃうと、気を使っちゃって、日曜日なんかだとね。邪魔したら申し訳ないなということ。

行くでって、行けよって、つつい山へ連れて行ったりしちゃうので。それは、平日になるとそこまで登れないだろうから、やっぱりそういう、土日になるのだろうなと。山、夏休みとかね、そういうことになるのかなと思ったのです。

いや、それはいい……

○豊永氏　茶屋の活性にもつながるかなと思っています。

○越智氏　それは逆に言えば、いいのかなと。すみません。

○梶木座長　いえいえ、貴重な意見だと思います。

つつい邪魔になるかなって言って、引率しちゃうとそう思いますよね。子供が行っちゃいけない場所みたいに、勝手に。

○越智氏　行っちゃいけないというか。邪魔するなよお前らみたいな、前で休憩もさせてもらうのですけれどもね。

○梶木座長　ありがとうございます。

澤井さん、何かありますか。

スポーツだったりアートだったりの経験、印象的な。子供のころに。

じゃあ、越智さん。

○越智氏　ごめんなさい。遊びとスポーツと比べると、どうなのかなと思ってしまって。自分が、私がね。スポーツという捉え方なのか、遊びという捉え方かによって全然変わってくるだろうなと思うのです。

スポーツになると、競争心が出てきて、おいおいおい、指導者、教えているやんかになってくるし、勝つためにどうなるねんという、親が必死になっているやんてなってしまうのかなと思って。レクリエーションなのか、遊びなのかという捉え方で全然変わるやろなというふうには、お話聞いていて思っています。

だから、そのコミュニケーションというのは、全然ありやと思うし、楽しかったよね、汗流してというのは、全然ありやと思うのですけれども。

だからスポーツなのか、レクリエーションなのか、遊びなのかなと、その辺すみません、思いました。

○梶木座長　ありがとうございます。

澤井さん、何か思いつきました。

○澤井氏　私もそこはちょっと引っかかるというか、何だろう。うーんという感じですね。

レクリエーションからいえば、同じ釜の飯を食うじゃないけど、食べ物を一緒につくって食べるのが、一番コミュニケーションがとれるっていうのは、実感しています。

豊永さんが言われていた、うちの近くに社寺仏閣で、自由に遊んでくださいっていうところがあんまり思いつかなくて、なので私は逆に、考え方は同じなのですが、今あるものを生かす。例えば、うちの近くの児童館で、最近土曜日に裏山に登りましょうっていうイベントがあったのです。私たちも活動している場所なので、ふだん。

○越智氏　どこ。

○澤井氏 板宿児童館なのです。八幡神社の、六甲縦走の麓で遊ぼうっていう話で、この間神戸市さんが来てくれたときに、あの活動はすごいですねっていう話をしたら、アドバイザーみたいな方が入って、その人が中心になって子供たちを連れてお山に戻ろうっていうのを聞いて、ああ、それはいい考えだなと思って。

私たちみたいに外遊びをしている者が、そういう児童館とか、それこそお寺とかに、アドバイザーじゃないけれども、ちょっと入って、ここではこんな遊びができますよという、外遊びの提供っていうか、ちょっとしたアドバイスじゃないけれども、入れるとわざわざつくらなくても、何もなかった場所から遊び場が生まれてくるのじゃないかなと思って。

私たちも、外遊びサイトじゃないけれども、そういうところに、例えば登録をします。今度、3回目にやるプレーパークみたいな感じで、神戸市さんがやるイベントに私たちがアドバイザーとして入ってする。神戸市さんから、イベントが成立するし、私たちもこういう遊び場が地域にあるよというアピールもできる。ちょっとうまいこと言えていないのですけれども。

何か、お互い、プラスになるようなサイトというか、安心して、保護者がその場所を知っているというのも安心かなと思って。

例えば、地域ですんでいます、校外学習で子供たちが行きました。でも、親は見えない。学校は大丈夫だと言っているけれども、大丈夫なんかなという不安が多分あると思うので。

すぐーるとかで、今日は、例えば地域の児童館で土曜日にこういうイベントがありますとか、何か親も行ったことないけれども、そういう情報、学校が発信しているすぐーるから来るものだから、多分、安心、見てないけれども、ちょっとは安心があるかなというので。

そういうのが連携していけたらなと思いました。

○梶木座長 情報の共有って、すごく大事ですよ。すぐ見てあげてくださいね。

アートとかスポーツとかコミュニケーションのツールとしてっていう、山下さんからのお題ですけれども、確かに一緒に何か、音楽を奏でるとか、打楽器をしてみるとか。子供たちって、割とすぐに音楽というか、叩いたりとかしだしたりするというのでいうと、書くとかじゃなくて、そういう歌を歌ってみようとか、お芝居に勝手になっていったりとか、そういう役割でやっていくことも多いので、それもすごいコミュニケーションが発達していくのだろうなと思うのと、やはり澤井さんがおっしゃった、食べ物というのは、それこそ最後の晩さんは、食べていますよね。

だからいろんなときに人間は食べるのだと。そこが最後のコミュニケーションの場所だし、おいしいものを一緒に食べるとか、自分たちで一緒につくったっていうのは最高においしくなるので、そういう食べ物、生きるためにも大事だし、遊びの中で、もっとできていくといいのかなと思いました。

私個人的に、コミュニケーションのツールとしてのスポーツとかって、スポーツかどうか分かんないですけれども、年齢が年齢だけに、ゴム跳びとか、ゴム段って言うのでしたっけ、ゴム跳びとか、家の前でやって、これクリアしたいとかっていうのがあったんで、頑張って、もう燃えてやっていたときもありますけれども。

でも本当に、コミュニケーションという話で言うと、ちょっとドイツの専門家というのいろいろ取り出したときに、あやとりのひも1本持っているだけで、対話になるっていうので。だから、電車に乗るときとかは持っているのだ。何か、折り紙持っていることとかっていうのは、すごく大事で、ちっちゃい子がぐずっていたら、折り紙してあげようかって出ていくのだとか、あやとり、こうやったら、とってみて言ったら、大体子供とってくれるとか、何かそういう、ちょっとしたコミュニケーションツールになるんだと思います。そういう技を持っていると。

しりとりでも、すごくできると思うのですけれども、しりとり、いろんなしりとり分かっているとかね。何かそういうのを、大人が、親もあまりやらなくなっているの、電車の中ですぐにスマホになってしまうのって、そういうことだったりするのか

など思いましたけれども。

頑張っしてりとりなんかも、「る」とか来ないでよって思いながらやるのかとか、面白かったなど思ったりもしました。

山下さん、回答になってないですよ、我々。ごめんなさい。

○山下氏 いえいえ、大変ありがとうございました。

すみません、皆様のお話聞いていて一つ事例を思い出したので、御紹介してもよろしいですか。

○梶木座長 お願いします。

○山下氏 ありがとうございます。

こちら、佐賀県の温泉街の小学校の廃校を、合宿施設にイノベーションするという事例で、先ほどおっしゃっていた、みんなで同じ釜の飯を食うというところでちょっと思い出したのですけれども。

本当に小学校校舎を、少しペインティングなんかをして、低コストで手をつけて、スポーツという言葉は、レクリエーションと捉えていただければと思うのですけれども、競争だけって、コミュニケーションをすごく、具体的プログラムがないと、コミュニケーション、本当に身につけていらっしやらない子供たちが非常に増えていまして、こういった、本当に大部屋で寝るとか。

あとは、小学生ですけれども、配膳はなくて、みんなで手をかけて、最後つくるみたいなものを残している食堂ですとか、何よりも地元の、地域の方々が、小学校跡地をイノベーション、再生をしたら、私たちにとっても大事な場所になるのだと。

単によそから人が来て、何かをしているのじゃなくて、この場所を通して、地元の人とのコミュニケーションが生まれるようなことを、どうしたらできるだろうかということの基本構想のところから、皆様と丁寧に話し合っって、作られたそうなのですから。

私、1回、現地に加わってきたのですが、本当に、そんなにコストをかけていらっ

しゃらない。小学校の建物を活かしたスペースだったのですけれども、本当に何か、それを説明されたり、近所のお店の人たちがすごくうれしそうに御案内して下さるのが印象的でした。

安全と安心というのは、本当に同義語ではないということをも身につまされた今日ですけれども、やっぱりこういうある一定の確立されたスペースであれば、安全であり、安心を少しずつでも取り戻せる機会創出ができるのかなと。逆に、本当に丁寧にやらないといけない時期かなみたいなものを感じておりまして、お伝えいたしました。

○梶木座長　　ありがとうございます。

本当に地元の人たちがつくっていくってことで、何か与えられたものをつくらされるのではなくて、自分たち一人一人がプレーヤーになって、やってみたいっていう、大人の遊びの中も、気持ちも入っているのかな。私も入れてっていう、そういう感じですよ。

○山下氏　　おっしゃるとおりです。

○梶木座長　　そういう関係性というのは、すごく大事だし、そういうことが何か危機的な状況に、震災とか大きな災害のときに、近所で助け合えるような、そういう関係性がふだんからあるっていうことも、我々神戸の人間ですから、それを子供たちに伝えておくっていうことも、すごく大事なことかなって思います。

ちょっと時間が押してきておりますが、次の、最後ですね。神戸市への提言の検討ということで、私たち、理想を語っているメンバーは、3回目には、神戸市への提言というのをまとめないといけないというミッションがございまして、まとまるのだろうかと思いつつも、やっていかねばならないんですけれども。

いろんなキーワードが出てきているかなと思いますけれども、安心な居場所ということで、安全はもちろん確保しながらも、安心な居場所であるということでしたりとか、空間的に、どんな空間が求められているのかっていうこととか、それから時間で、まずは時間を確保するにはどういう工夫をしていったらいいんだろうとか、

それから、あとは仲間ですね。子供たちが一緒に遊べるとか、子供同士が遊べるのはもちろんですけども、大人と子供の関係性ということもあります。

そういう、大人が子供の遊び場に、見守るって言ったときの、どういう人材がいいのかなってというようなことも、提言していくことが必要になってこようかと思います。

あとは、そういう提言したからには、ちゃんと予算つけてよねって、本当は一番最初に言いたいところなんですけれども、地域みんなで頑張ってよねって言われると、なかなかそれだけではできないところもありますので、こういうふうと一緒にやっついこうっていうときには、しっかりと予算づけをしてくださいねっていうのは、提言の後に、頑張っていていただくことかもしれませんけども、それはちょっと置いといて、理想の中でも、これからの神戸の子供たちのために、どういう、外遊びができる場所ですね、地域の方含めていろんなプレーヤーがいて、一緒に共同でつくっていくっていうことに関して、皆さんから御意見をいただきたいと思います。

いかがでしょうか。ぜひこれは、提言に入れたいというようなことをおっしゃっていただけると、非常にありがたいなと思うのですけれども。

提言にまとめないといけないのです。

というときに、キーワード欲しいですよ。それに、何というのですか、尾ひれはひれというか、つけていく感じになりますので。

ずっと語ってきていただいたことで、皆さん一貫しておっしゃっていること、ぶれないで言ってくださっていますし、お互いの意見を聞き合った中で、あっそれいいよねっていうところもあったと思いますので、自分の意見だけじゃなくても、ほかの方が言われた、あれは入れたいなみたいなのがあったら、それも含めて言っていただくとありがたいなと思います。

いかがでしょうか。誰からでもいいですけども。

○越智氏 提言になるかどうか分かりませんがいいですか。

○梶木座長 ありがとうございます。

○越智氏　　ずっとお話させてもらっていて、最初も言いましたけれども、子育てされている親御さんたちに、どういうふうな発信ができるのか。神戸市ではどういう発信をするのか、今、外遊びという話がありましたけれども。

それと、僕自身、児童館を運営させてもらっていたり、学童を運営させてもらっていて、今出ました板宿さんがそれをやっている。多分、うちのスタッフも絡んでいるのかな。

外遊び、児童館、今こども家庭局でかなり無理をお願いして、児童館の活用ということで、今、張り切っていますので。児童館のほうも、今、変わろうと頑張っていたいて、外遊びとか、その辺のことを子育て中の親御さんの支援ということで、頑張っていくので、そこら辺の中に、親御さんにどういうふうに外遊び大事だよとか、活用してくださいねというところをアピールできるのかなというところ。

それと、さっきも先生にもお話ししましたけれども、この時期の子供の、この部分は大事だよっていうことを、この提言の中に入れていただければいいのですけれども。

僕たちもこの仕事をしているので、実はあるのですけれども、僕ら、経験論で喋っていることのほうが多いので、やっぱり今、エビデンスはっていう話になってしまうので、数字的なこと、36の動きとかっていうのが出てきていますけれども、その辺も、何かこう、親に分かるようにどう伝えていくのか。ごめんなさい、いい言葉が出ませんけれども、あればいいのかなと思いますし、もう1点は、提言なのかどうか、こういうふうに活動していますよっていう人たちの紹介もしていただければ、すごく行きやすくなるのと違うかなと思いますので。

○梶木座長　　そうですね。本当にいっぱい言っていただいて、ありがとうございます。

児童館の活用って、すごく大事ですよ。子育て中の、やはり神戸市って児童館がたくさんあるのが特徴になっていますので、そこをまず、どこの中学校区にも1館はあるというようなことなので、屋内遊び場しかないところもありますけれども、でも

やはりそこには専門家がいてるところも含めて、児童館のこれからの活用って
いうのは、すごいキーになってくるかなと思いますね。

○越智氏　それこそ澤井さんみたいに協力するよって言っていただければ、児童館、
やりやすくなるのです。その専門も、いるかって言ったら、難しいところはできない。
でも、そういう人がいてはるから、協力するよって言ったけど、それはすごく助か
るのです。

○梶木座長　そうですね。ここの山のことなら、私に任せてっていう。

○越智氏　やらせてって言っていただければ、地域としてはすごくありがたい。

○梶木座長　そうですね。例えば今日はスズメバチが出るからっていう情報があ
るだけでも、すごいその自然の中に入っていきやすかったりしますし、ということで
言うと、そういうつながりですよ。

ありがとうございます。

ほか、いかがでしょうか。誰からでも。口火切っていただけましたら。

澤井さん、いけますか。

○澤井氏　提言があんまり分からなくて。

キーワードだったら、退屈。退屈にはいろんな意味があって、小学生の休み時間、
5分じゃなくて、もっと伸ばしてほしいとか、放課後時間たくさん取ってほしいとか、
あと、例えば山に入ったときに、そういうアドバイザーの方がいたら、保護者も何だ
ろう、危険を察知してすごさなくても、保護者も自然を楽しめる。保護者も退屈って
いう貴重な時間を味わえるというのも、大事かなと思いました。

また、多分それこそスズメバチいるからとかって親が気にしなくても、ここはいる
から気をつけるのだっていうアドバイスをもらったら、あとは自分も遊べるんじゃない
かなと。

○梶木座長　そうですね。みんながスズメバチ知っていたらいいですけどね。

○澤井氏　そうですね、知らない……

○梶木座長 知らない人がいっぱいいますからね。

○澤井氏 まずはそこからですね。

○梶木座長 ハチいてるって。それスズメバチやでって言わないと分からない人もいますからね。

でも、1回見たらね、分かってくることもあるので。

そういうインタープリターみたいな人もたくさんおられるのでね。そういう方も活躍をしていただけたらなと思います。時間ですね、まずは。

子供たちに何か、ぼーっとしながら、何したろみたいな、そういう考えさせる時間があると、本当にいいですね。

豊永さん、いかがですか。

○豊永氏 私も提言というのが分からないのですけれども。

私が一王山に遊びに来る子供たちを見ていて感じることを、ちょっとお話ししたいと思います。

とても素直なのです、みんな。すごく素直過ぎて、驚くぐらい素直なときがあります。それと、親や周りから褒められたい子供が多いのです。親の何か期待の目を通して、理想の自分像をつくり出しているようにも、何となく見えます。

褒めるとかというものが、とってもいいことだとは思っているのですけれども、自分の周りに迫って来る評価みたいな、そういう情報を気にし過ぎて、それをすごく追っかけているのかなと。だから、もう少しそれを回避するには、自然と戯れる場所とか、そういう環境に身を置くとか、体を使ってしっかり遊ぶとか、ジャッジされない環境が大事ななと思っています。

そうすることで、自分で決める力みたいなものを持ってほしいかなと思います。それにはやっぱり、こんなところがあるよ、あんなところもあるよというリサーチをして、場所の提供ですよ。あまり何も決めないところで過ごすという、そういうときが欲しいなと思っています。

○梶木座長　　ありがとうございます。いっぱいキーワード入っていたと思いますけれども。

合致されないとか、すごく、学校ではない場所。家でも学校でもない場所っていうところで言うと、褒めて親が動かそうとしたりということもなくて、学校の中で評価されてということもあったりするので、そういうのが全然ない世界という、素直なのですという。素に戻れるみたいなね。

○豊永氏　　ただ、素直過ぎて、言うこと聞き過ぎているのかなという感じがするのですよ。すっと入り過ぎて。そうじゃない、自分で決めればいい、その決めることができないような気がしています。

○梶木座長　　自分で決めていいのだよということを、もっと伝えてあげて、決めてごらんって。

でも、私も大学で教員していますけれども、自由にやっごらんとか、テーマが自由というの、自由は嫌いって言われますからね。できない。

先生、決めてというのを、判断をこちらに委ねてくるということ、すごく多いので、何かそれはずっと、小さいころからの積み重ねで、自分よりも、自分で責任をとらないような育て方を、大人ができてしまっているのかなと思うことはよくあるので、そこら辺を変えたいですね。

はい、どうぞ。

○越智氏　　褒めるという言葉ではなくて、認めるという言葉、よく使いますよね。褒めるって言ったら、褒め殺しがあって、何とでも褒めて、スコンと落とそうと思ったら落とせるけれども、認めるということは、ちょっとした違いを、子供たちが頑張ったよねというところを認める。

その差は、一人一人の、受け入れるということですから、認めるということ。それを受け入れて、その子の成長を受け入れたようなので、お前、今日はこうやったけど、さっきよりも、これだけ伸びたやんかというところの、見てたよとか、頑張ったよね

っていう、一人一人の評価をしてやるのが大事なのか。

それは、評価づけで悪いのではなくて、褒められたいのではなくて、認めてもらうことによって、俺、頑張るわなという子供たちに接してもらう。

褒められようと思う子は、評価を物すごく求めるので、いや、ちやうちやうという話にはなるかなと思います、

僕自身はそっちかな。だから評価という言葉、認めるを評価と言われたら困るのですけれども。難しいなと思って聞いていたのですけれどもね。

○梶木座長　　そうですよね。認められるってうれしいですよ。

○越智氏　　受け入れてもらえるってことは。

○梶木座長　　ねえ、やっぱりね。

○越智氏　　それぞれの状態を受け入れ……

○梶木座長　　見てくれていたっていう事実の上に、認めるというのがくるので、ずっと自分のことを見てくれていた人がいるんだっていうことが、きっと安心感というのにつながってくるんですよ。

○澤井氏　　失敗できる場が少ない、失敗を経験している子が少ない。何かプライドが高くて、失敗するのが怖いからチャレンジしない。

○越智氏　　そうですね。

○澤井氏　　豊永さんが言われたみたいな方が、本当にうちも多くて、この失敗を経験してないからかなというのを、すごく感じます。

○梶木座長　　失敗するのがいやだから先生決めてという感じになってきて、安全に橋を渡りたいというのがすごく多いですよ。

○越智氏　　失敗という言葉じゃないのです。うまいこといかなかったということなのです。だから僕自身子供たちの皆さんに言うことは、失敗違うねん、うまいこといかへんかった。ほかの子はせえへんかったけど、あんたそれしたからこれをしたらうまいこといかへんかったということを見つけたんやでという。

だからほかの子より一つかしこまっているねん。やらへん子、それしかわかってないねん。だから次どうするっていう、声をかけたれっていう話をしているのですけれども。

そうすることによって、あっそうか、次頑張ろうかなと思ってもらえればいいと思うので、失敗という言葉はやめませんかと思いました。うまいこといかなかったとしてあげてください。

そうしたら、あかんかったよな。あんたどうするの、同じこと3回したら、そらあかんけどなみたいなことがあるじゃないですか。でも、ちょっとでも変えてやるとなったら、そこは認めてもらったほうがいいのですよね。あんたこうしたら、こう変えたからこうなっている、ということは認めたことになると思うのですね。

○梶木座長　　いいお話ですね。とてもいいなと思います。

何か、芝田さんが言いたそうにこちらを。

○芝田次長　　ありがとうございます。本当にいろいろと教えていただいて。

今3つぐらい頭の中に浮かんでいることがあって、それは時間の話は何度か出てきたと思うのですけれども、私たち今教育委員会の人間として、まずは形から時間を生み出さなあかんのかなというふうには思っています。

先ほどから、授業時数の話とかも、放課後の時間を生み出すというところもあるのですけれども、理想は、最終的には自分で時間をつくるものだと思っているので、隙間の時間から、自分はやりたいことがどんどん生まれてくる。でも今、それをいきなりというふうなところではなくて、まずは形から入るのだとすれば、まずは時間をつくってあげるところは、一定それは教育委員会、学校側の責任のもとでというのはあるかも分からないのですけれども、入口はそこなのかなという時間の生み出し方というのは、大事なところかなと思っています。

2つ目が、先ほどありました、いろんなことを知らせるという、紹介するということが、私、とっても大事だなと思っています。

実は私、先日西区のほうの学校に行くことがありまして、そこでまずその自治会の方が、自ら放課後に子供たちを集めて、一部自然の中で一緒に遊ぶというようなことを計画されているとか、あと年に1回ですけれども、その学校の子供たちを集めて、連れて行くというようなことがあって、親もすごく安心だと思うのですよね。

自治会が、地域の中でやられているところがあるということを知って、いろんなところで、そんな動きが今あるのだなというようなことを感じたのですよね。

それは、多分知らせていくこと、地域は皆分かっているかも分かんないのですけれども、神戸市いろんな地域で、そういうところもあるんだなっていうようなことから、ちょっと刺激されて増えていかないのかなというようなことも思いますのでぜひいろんな紹介をしていくという、いろんな意味での紹介が必要なのかなというようなことも思いました。

あと一つは、仕事柄ですけれども、最初におっしゃっていただいた、寛容性っていうのはとても大事なことだろうなと。あれ駄目、これ駄目、これしたらどうするのっていうことじゃなくて、見方を変えた、そういう考え方っていうものができていってくれば、社会としてですけれども、いろいろ取り組みは大きく広がっていくのじゃないのかなというふうには思ったりはしました。

○梶木座長 ありがとうございます。

すごい提言につながることをうまくまとめていただいて、ありがとうございます。

丸山さん、いかがですか。

○丸山副局長 いろんな要素を皆さんたくさん言っていただいたので、消化しきれないのですけれども。

今言っていた理想としていることとか、今置かれている現状が、子育て中の親御さんから子供たちから、先ほど言われた大学生の、自由がちょっと嫌いっていうような言葉で、そういう人たちが大人になって、次また子育てをしていく世代になっていくっていう現状を踏まえて、神戸市としては、施策を考えていくときにこういう

子供を忘れないで、考えないといけないってことが身にしみたなと思っています。

子育て中の親御さんに発信するときに、さっきの皆さんの実体験もだし、生の声もそうだし、先生が言われていた研究データのエビデンスのことだとかも、親御さんには、そういうふうになっているのかということ、ちょっとでも体験するようなところに、私も一緒に楽しめるようにいってみようとか思うような発信が大事になるのかなというふうに思いました。

○梶木座長 ありがとうございます。発信も本当に啓発、大事ですね。

いろんな施策を打っても、市民に届かないようでは空振りですので、やはりその発信力だったり、きちんと伝えるということで、エビデンスをしっかりベースに持つということも大事かなと思います。

山下さん、いかがでしょうか。何か、キーワード的な、提言に向けて。

○山下氏 ありがとうございます。素晴らしいお言葉の数々です。

そうですね。一緒になってしまいますが、どなたかがおっしゃっていた、チューニングができるし、本当に気のあう人というのが必ずいて、それは同級生でもなければ、すごいおじいちゃんだったりするかもしれないのだろうと思うのですけれども、私のこういった実体験ありますけれども、何かそういう意味では、サードプレイスという、第三の場所という言葉がありますけれども、家と学校だけじゃない場所があるということ、きちんとお伝えしたいなって思いますし、この場で言うことがあっているか、わからないですが、義務教育がしんどくなったとしても、違う場所に行ってもいいんじゃないかなっていうぐらい、言ってあげたいな。

元気になったら、義務教育にちゃんと戻ればいいのじゃないのかなと、それぐらい言ってあげたいなとあえて思うぐらい大変な時代だなと感じております。

そういう意味で言いますと、あとは、気の合う人は必ずいるよっていうことですか、あとは大人が変わったっていうことを自覚しないとイケないなということが一番とにかく思う。子供は変わってないって思っていたんですけれども、そうか本当に

子どもは変わっていなくて大人が変わったんだなって、私自身自覚しましたので、これをしっかり大人側が自覚して、あと最後に、見守るということを、神戸の皆様暖かくて、優しい方が多いと思っておりますので、さっきのイヤホンしていない話じゃないですけども、見守るっていうことはすばらしいことなんだということですね、最近眺める、見守ると眺めるの定義はちょっとよく分かっておりませんが、やっぱり他者を認知してこそ、始まる、始められることがあると思っておりますので、無関心は、本当に何も始まらないですから、自分より弱い人がいたらまずは見守るということが、どれだけ価値があるのか、それを何か、しっかりメッセージ出来たらありがたいなというふうに思って、皆さんのお話をお聞きしておりました。ありがとうございました。

○梶木座長　　ありがとうございます。本当にサードプレイス、いろんなところで今言われていますけれども、大人が変わらないといけないと。自分たち変わってきたつもりはないのですけれども、何かやっぱり大人になるっていうことはそういうことなのかと思ったりもしますけれども。

あと、やっぱり発信している子供の意見を、私たちちゃんと耳を傾けて聞くっていうことが、やっぱりもう分かった、分かったとかしてしまうのではなくって、ちゃんと主張をしていることを聞く体制っていうのを持たないと、子供たちも先ほどの認められているっていうことを言うのであれば、子供の意見を聞くっていうことが、サードプレイスにはなお求められることかなと思います。

いろいろ貴重な御意見ありがとうございました。

では、今後の進め方についてちょっと確認していきたいと思うのですけれども。

第3回というのが、これ最後になるのですけれども、これまでの議論を踏まえて、提言案をまとめて、それを皆さんに確認していただくというような方向でやっていきたいなと思うのですけれども。

第3回、次回のフォーラムでは、一般の参加者の方にも提言案を発表しまして、そ

してそこからまた御意見をいただいて、最終的な提言をまとめていくという形に持っていければなと思っているのですけれども、何かもうちょっとほかのやり方がいいなと思われる方がおられれば、御意見いただければと思いますが、いかがでしょうか。

ちょっと今回第1回、第2回は私たちだけで意見を言う場で、傍聴の方来ていただいている、本当に御意見をいただいてなくて申し訳ないんですけれども、第3回の中で、提言案について、御意見をいただくという機会を設けたいなと思っているのですが、いかがでしょうか。

○越智氏 全然いいと思いますが、大変だと思いますよ。それだけです。

○梶木座長 大変だと思いますけれども。でも、やっぱりより多くの人の意見を聞くということで、理想論、多くの方と一緒に語りたいなというところもありますので、提言案について、一般の方からも御意見をいただきたいなと思っております。

それから、次回フォーラムでは、実際に外遊びの実践をされている団体をゲストに招きまして、外遊びの実践団体の事例紹介をして頂くと、そういうことだったりとか、市民の方にも参加していただいて、外遊びの安全安心な居場所及び提言案への意見交換、そして外遊び体験という、盛りだくさんなフォーラムにしていければと思っておりますが、それに関してもいかがでしょうか。

ぜひ、多くの親御さん、子供たちに参加していただくというふうなこともありますので、早めの周知というのが大事かなと思っています。

3月に開催予定ですが、もう2月に入っていますので、提言案を早めにまとめて、それで多くの市民の方に参加していただく、あるいは外遊びの実践団体の方にも協力していただかないといけませんので、今からお声かけをしていくということになるろうかと思いますが、そんな感じで。

○越智氏 一つだけ。

○梶木座長 一つでなくても、もっと。

○越智氏 天気、雨やったらどうするか考えてくださいね。

○梶木座長　　そうですね。

○越智氏　　これ、起こり得ることだと思います。

○梶木座長　　それはそうですね。

○越智氏　　いや、雨、合羽着てやるんやったら。わんぱ〜くとか外遊び、平気で僕らやっていますけれどもね。

　　いや、それでいいのやったらいいのですけれども。参加される方とか、いろいろあるから、雨のバージョンだけ考えとかなないと。

○梶木座長　　あとどこでやるかとかね、それも含めて。逃げ場のあるところでやるのか、合羽着てでもやるのか。でも、警報出たらやめようねとか、そういう話になりますからね。

　　そのあたりは、今後、事務局と入念に御相談させていただいてというところでのよろしいでしょうか。

　　澤井さん、何か提案ありますか。

○澤井氏　　雨でもやってほしいです。

　　警報まではいかないのですけれども、何か雨の遊び方も知ってもらいたいなという。

○梶木座長　　ちゃぷちゃぷとね。そうですね。

　　豊永さん、どうですか。

○豊永氏　　大丈夫です。

○梶木座長　　大丈夫ですか。雨のときの何か意見ありますか。

○豊永氏　　私はもう、自然に任せる。

○梶木座長　　はい、分かりました。

　　芝田さん、丸山さん、いかがですか。

○丸山氏　　開催方法は。皆さん雨のときどうされているか聞きたかったのです。

○梶木座長　　やる。

○越智氏　　子供らは合羽着て外出ていったら、雨しか出会わない体験ができますも

のね。

○澤井氏　　ちょっと逃げ場があれば、十分。

○豊永氏　　案外森の中は、雨はかかりませんよ。

○澤井氏　　葉っぱの屋根があるので。

○越智氏　　雨のレベルですけどね。

○澤井氏　　そうですね。

○越智氏　　でも、それも面白い。木を叩いたら、雨がどさっと落ちてくるのも、物すごくいい体験だと思いますしねという。

だから、そっちをどう捉えるかです。

○梶木座長　　私、晴女なのです。

○越智氏　　あっ、そうなのですか。要らんこと言いました。失礼いたしました。

○梶木座長　　いや、分かんないですけども。ここで言っちゃっていいかなと。

いやいや、だから、よっぽどすごい雨の遊びを体験をしたかったことになるのかな。

○越智氏　　時の運ですからね。

○梶木座長　　でも、本当に雨の中では、雨独自の遊び方があるのですけれども。

ちょっとハードルが高くなってしまふかもしれないので、参加者さんが減ってしまうことも懸念されるかもしれません。

ちょっと事務局さんと、またよく相談させていただいて、決めていきたいかなと思います。

これでよろしいですかね。

本日はこれで、私が頂いていた議事については、一応終了かなと思うのですけれども、そのほか、皆様から御意見を頂けたらいいかなと思うのですけれども、何かございますか。

山下さん、何かありますか。

次、山下さん、大活躍していただこうかなと思っているのですが。

○山下氏　　いえいえ、今日のところは大丈夫です。

○梶木座長　　じゃあまた、第3回、どうぞよろしく願いいたします。

○山下氏　　第3回こそリアルで参加いたします。

○梶木座長　　はい、ぜひ、楽しみにしております。

○山下氏　　こちらこそです。ありがとうございます。

○梶木座長　　はい、ではこれで事務局にお渡ししたいと思います。よろしいでしょうか。

○江坂課長　　本日、長時間ありがとうございました。

先ほど、お話のございました神戸市への提言につきましては、最終的には、第3回のフォーラムの後に、梶木座長から神戸市長に御提出をいただく予定となっております。

以上でございまして、これで「令和5年度第2回神戸の子ども居場所フォーラム～子どもが外遊びできる協働の居場所づくり～」を閉会させていただきます。

本日はどうもありがとうございました。

閉会　午後4時56分